

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

館林市つつじが岡公園の運営等に関する調査研究報告

著者	古屋 秀樹
雑誌名	地域活性化研究所報
巻	14
ページ	27-31
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009339/

館林市つつじが岡公園の運営等に関する調査研究報告

古屋 秀樹(国際地域学部国際観光学科 教授)

1. はじめに

本稿では、館林市つつじが岡公園（群馬県）を対象として、現地調査の実施ならびに「つつじが岡公園運営会議」の運営を行いながら、入園者データの検証や公園の潜在的な魅力を発掘し、つつじが岡公園の有効利用、入園者増加を目的とした受託研究の成果について報告する。

つつじが岡公園内のツツジは、寛文年間における徳川綱吉や歴代の館林城主により保護・育成がなされ、公園自体は大正 12 年に県有財産となると同時に県立公園として発足した。その後、昭和 9 年には国の名勝に指定されている。そして、昭和 52 年に都市公園（総合公園）として整備され、平成 26 年 4 月より群馬県から館林市へ移管され、現在に至っている。

公園の利用者数は、ツツジのシーズンである毎年 4 月上旬から 5 月上旬にかけて「つつじまつり」が開催されるために毎年十数万人が来訪し、これは 1 年間の総来訪者の約 7 割を占める。図 1 は、つつじまつりの総入園者数の推移を示したものであるが、東日本大震災（平成 23 年度）、ツツジ開花の不良（平成 25 年度）により、近年は減少傾向であった。しかし平成 28 年度は、花の咲き具合は例年になく良く、見頃時期の来訪者からは好評であり、対前年度比 105.1 に改善された。個人来園者は、新聞・ラジオ・テレビ・ホームページ・配布チラシを見て来園した人が多く、それらの広告効果が高いと考えられること、外国人来園者（特に台湾・韓国・中国からと推測）が多く、ビュースポット・写真撮影スポットの PR や多言語パンフレット・表示の作成が重要となることなどが明らかになった。一方、例年に比べて 1 週間前後開花が早かったため、一番の集客時期である 4 月 29 日～5 月 5 日の時期には見頃のピークを過ぎてしまい、十分な誘客とならなかった。そのため、遅咲きのツツジの植生範囲を広げたり、ツツジの開花時期を遅らせたりする方法等の研究・実践が待たれる。

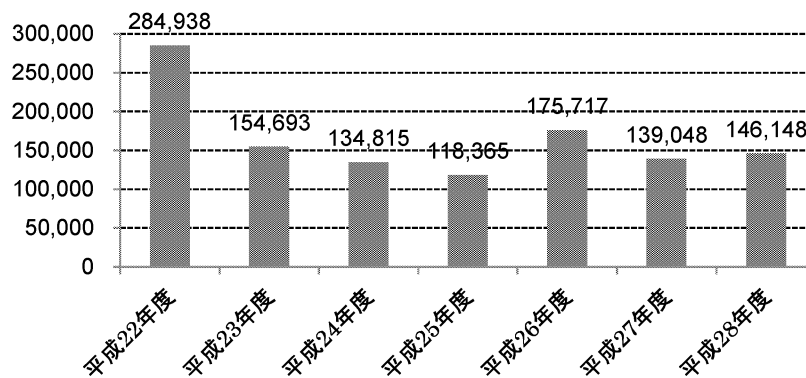


図 1 つつじまつり時（4 月初旬～5 月初旬：約 30 日間）の総入園者数推移（単位：人）

つつじが岡公園の最盛期の入園者数は約 30 万人とも言われており、公園の一層の有効利用を問題意識として、公園のあり方、活性化の目指す方向性の明確化とそれに合致した利用・活用方法の検討が必要不可欠といえる。そのために、本受託研究では、先進事例の調査（2 章）、公園の賑わい創出や収益確保に向けた具体的な検討（3 章）、各分野で造詣の深いメンバーで構成される「つつじが岡公園運営会議」の運営（4 章）を通じて、つつじが岡公園の活性化、好ましい運営について検討を行った。

2. 公園有効利用のための先進事例調査ならびにプロモーション事業

公園の有効利用の先進事例調査ならびにシンガポールにおけるプロモーションを行った。

2.1 名古屋市の事例

名古屋市では、名古屋市公園経営基本方針を策定（平成 24 年 6 月）し、「管理する資産」から「経営する資産」に公園自体の位置づけを変えながら、利用者志向の重視、規制緩和等による市民・事業

者の参画の拡大、多様な資金調達とサービスの還元をはじめとする経営改善が試みられている。その事例として、①スマホを使用した動物たちと一緒に写真が撮れる『東山動植物園 AR カメラアプリ』の開発（無料、NTT ドコモとの共同事業）、②住民の企画運営による白鳥庭園での市民茶会の開催、③鶴舞公園におけるキッチンカーやビアガーデンの実施、久屋大通庭園フラリエにおける花と関連した無料催事など多様なイベント実施、④緑のパートナー協定（パークマスターの公園管理への参画）などを把握できた。緑のパートナー制度であるが、これは市との密接な連携と協働を前提に、公園、街路樹等の管理において、自主的な企画立案と一定の責任分担により総合的な管理運営を行う団体を緑のまちづくり条例に基づき認定する名古屋市独自の制度であり、住民参加型の公園管理の一例として位置づけできる。

2.2 兵庫県および神戸市の事例

兵庫県立有馬富士公園では、「参画と協働」との理念のもとで、①公園運営・計画協議会（多様な意思を調整、統一する公園運営の意思決定機関）の設立ならびに②夢プログラム（手作りのプログラムの企画、提案）が実施されている。公園運営・計画協議会は「豊かな自然環境と一体となった県民参画型の公園」の実現を目差して、県民参画のための管理運営計画を検討しながら、「無責任な発言を行わない、責任を持つ」という不文律のもとで、部会を設けて細かく議論し、参画型の公園づくりにむけた活動を実施していた。

一方、神戸市・東遊園地では、住みやすいまちを創るため、またエリア価値を高めるために公園などのパブリックスペースが注目されている中で、市民参画型事業である社会実験「URBAN PICNIC」が行われている。これは、神戸パークマネジメント社会実験実行委員会によるアウトドアライブラリー活動とファーマーズマーケットの2つの主要プログラムから構成され、委員会により様々な外部団体との連携、公園におけるプログラムの調整、実施が行われている。

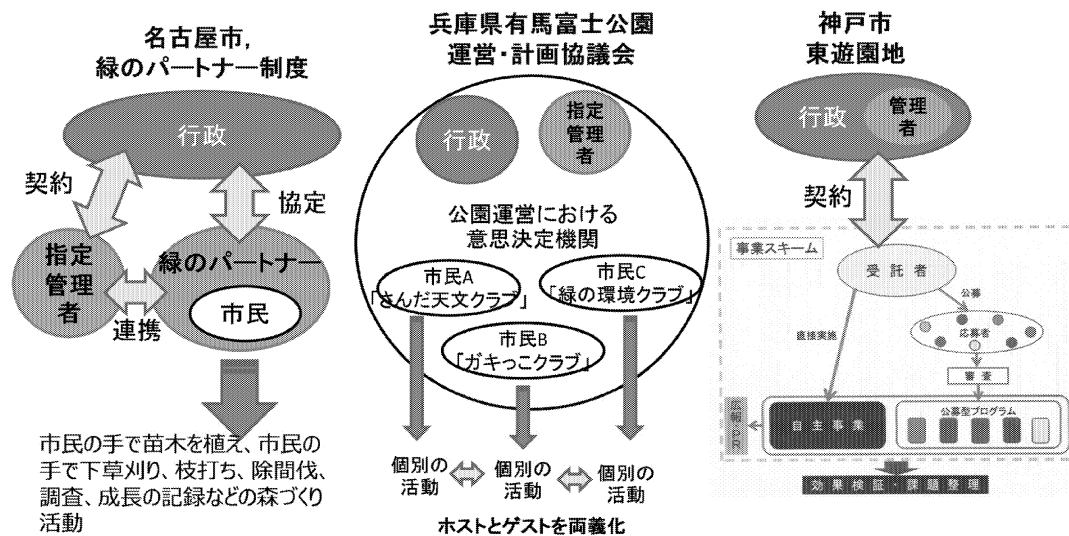


図2 公園の管理運営体制の比較

2.3 古河総合公園の事例

茨城県古河市の古河総合公園（現在の古河公方公園）は、市民が集う現在の入会地・コモンズとして、また「人間の歴史と自然の変遷がない交ぜになった有為転変の風景」を意識して設計されるとともに、新たに提案された「パークマスター」が公園の維持管理だけでなく、イベントを企画・実施して、公園の顔となる役割を担うという特色を有している。その結果、「第3回文化景観の保護と管理に関するメリナ・メルクーリ国際賞」（主催：ユネスコ、ギリシャ）を受賞した（2003年）。この賞は、世界の主要な文化景観の保護と管理を目的とした顕著な活動をたたえるものであり、Publicと市民との有機的連携、明確な来訪・利用の動機付けが可能になった仕掛けと考えることができる。このような考えは、シビックプライドの醸成やコミュニティデザインの考え方と軌を一にするものと考えられ、

その導入の背景や地域特性を十分理解しながら、つつじが岡公園への適用・実現可能性を検討する必要性が高いと考えられる。

2.4 シンガポールにおけるプロモーション活動の実施

シンガポールと日本の外交関係樹立 50 年周年を記念して 2016 年 10 月 29 日（土）、30 日（日）に SJ50 “Matsuri”（日星国交 50 周年の交流イベント）が開催された。このイベントに関連して、一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所は同時開催した Japan Travel Fair 2016 に独自ブースを展開したが、その一部を活用して館林市のプロモーション活動を行った。館林市からは、ゆるキャラである「ぽんちゃん」を移送し、イベントを盛り上げた。プロモーション活動を通じて、英語表記の看板・フライヤーなど事前準備が重要であること、シンガポール居住者はチラシの受け取りを好むこと、花などに関心があるため館林の観光資源は訴求力が高いと考えられること、プロモーションのみならず旅行商品もあわせて販売するような形式が収益確保の観点から必要と考えられること、などが明らかとなった。

3. 花を活用した観光振興に関する検討

公園の賑わい創出や収益確保の研究のために、東洋大学国際観光学科学生（3 年生 5 名、2 年生 5 名）が参画する体制を整え、若い学生の視点からの検討を行った。館林市への複数回の視察を通じて、観光振興における基本的考え方として、新しいものを取り入れるというより、今ある資源を磨き、発信することを重視することとした。様々な資源の活用や取り組み方策が考えられるものの、大学における研究の可能性、費用制約の中での施策実現性などから、「花観光」、「産業観光」、「館林市の情報発信」という 3 点に着目して研究を行った。本稿では、その中でも花を活用した観光振興について紹介する。

つつじが岡公園の観光振興では、つつじまつり期間（ピーク時）とそれ以外のオフピーク時の 2 区分それぞれについて検討する必要がある。まず前者であるが、大きな来訪動機であるツツジの鑑賞と異なる来訪動機、特色づくりが重要と考えられる。その 1 つとして、花を活かした物販があり、一例としてレジンを利用したアクセサリーの作成・販売が考えられる。レジンとは刺激臭が少ない透明の硬化樹脂のことで、UV タイプのものは紫外線に当てて硬化し、その中に花びらなどをパッキングすることができる。レジンに型に流し込み、パーツを使って好きなデザインにし、UV ランプで硬化して完成する。そこで、東武トレジャーガーデンより花びらを提供いただき、試作品を作った。小さい花はレジンに閉じ込めることができるため、ピアスや指輪にすることができる。

作成費用（概算）であるが、初期費用は UV ランプや UV レジンなど合わせて 8,551 円である。花を閉じ込めたレジンのパーツを 45 円/個として、指輪 1 つの作成費は 132 円となり、ネックレス：180 円/個、タッセル付きピアス：891 円/個であった。

表 1 初期費用とその他部品の費用

	物品	小計(円)
初期費用	UVランプ	1,890
	UVレジン(55g)	1,980
	指輪モールド	588
	半球モールド	865
	ヤットコ	852
	ピンバイス	2,376
	合計	8,551
その他部品	指輪土台(5個入り)	437
	ピアスパーツ	432
	9ピン(80本入り)	100
	タッセル(2個入り)	411



写真 1 レジンアクセサリーの試作品

今回は、小さな花びらで試作したが、今後はツツジの花全体を利用した作成法の検討が必要となる。

また、本年4月のつつじまつりで予定されているアクセサリーの販売、体験教室の開催をより効果的に行うために価格設定や十分な準備を進めていくことが必要である。

さらに、物販に加えて、つつじ鑑賞の満足度向上も重要である。現状では、最盛期において、必ずしもつつじが綺麗に見えるポイントに誘導できているとは限らない。また、来訪前に駐車場を検索したり、駐車場からの経路を適切に誘導することができていない。これは、公園HPで情報提供が十分でないことや検索ツール（Google）などで駐車場が検索できないこと、視点場までの経路探索ができないことによる。そこで、視点場にうまく誘導するツールとしてAR（Augmented Reality、拡張現実）の利用が考えられる。ARとは、コンピュータを利用し、現実の風景に情報を重ね合わせて表示する技術である。スマートフォンでは、あらかじめアプリをインストールし、GPSやQRコード読み取りながら、リンクしたサイトとの通信により、画面上に映し出される現実の風景に重ねて様々な情報を表示する。例えば、現実の風景に昔の風景を重ねたり、地域のキャラクターと一緒に撮ったりすることができる。一方で、ARのデメリットとして、アプリを利用する際に時間がかかること、コンテンツを逐次更新する必要性があること、高額な制作費用があげられる。

そこで、他の手段による疑似ARの仕組みをグーグルマップを用いて構築することを検討した。グーグルマップ内のマイマップによって、ポイントとなる場所を設定して詳細情報へのリンクを行い、視点場への経路誘導、最盛期の花山の写真の再生などが可能となる。低廉な導入コスト、アプリが事前にダウンロードが不要などのメリットが考えられる。本年度は、これらの整理にとどまったが、来年度では実際にシステムの構築を行う予定である。

この疑似ARは、オフピーク時への効果も期待できる。つつじの最盛期以外は美しい花山を楽しむことができない。そこで、オフシーズンに公園を訪れた人にバーチャルで最盛期の花山を体験してもらうことを代替手段として、最盛期への来訪動機・期待の醸成が期待できる。このオフシーズン対応では、さらなる集客のために、観光資源の切り口を変えながら活用したり、新たな観光テーマの設定をしたりと、潜在訪問者への動機づけが重要となる。その対策として、

- 1) イベント開催場所の移動：市内で行われているイベントの会場をつつじが岡公園に変更し、それを活用して公園の賑わいを創出する。
- 2) 日常的なイベントの開催：市民相互のコミュニケーションを取る場として公園の機能を高め、具体的にはワークショップ、教室、体験などを実施する。（例：男子小中学生向けに城沼の生態系についての教室、女子小中学生向けには館林の資源を使った押し花や花びら染めの体験教室、ハンカチやランチョンマットやコースター作成等）

が考えられる。そこで、本年度は染色の体験教室の実現に向けて、花びらを活用した染色の実験を行った。東武トレジャーガーデンよりバラの花びら（赤、ピンク、黄・オレンジ）を提供いただき、シルクハンカチを染色した。実験では、購入した器具や薬剤を使用して、館林市城沼公民館調理実習室で行った。

染色工程の第1段階目では、花びらの色素がある部分のみを利用するため、花びらと他の部分とに選別したのち、布の下漬け処理を行った。次に、フードプロセッサーで細かくした花びらに染色液を入れ、約1時間放置して色素を抽出した後、これをろ過した抽出液でシルクハンカチを染色、最後に発色剤を添加する手順で行った。全工程を行うのにほぼ1日かかったため、時間の限られる体験教室で全てを行うのは難しいと考えられる。そのため、実際に実施する場合、花びらの選別などの前半部分、もしくは染色する後半部分に限定するのが好ましいといえる。また、様々な薬品を使用するため安全性をチェックする必要がある。なお、花びらを使用した染色は、つつじが岡公園だけでなく、東武トレジャーガーデンの資源も利用することができ、館林の観光資源との親和性も高いと考えられる。

なお、作成コストはハンカチ代（500円）を含めて、1枚602円であった。本実験はバラを用いたものであるため、つつじを利用した試行が今後の課題といえる。

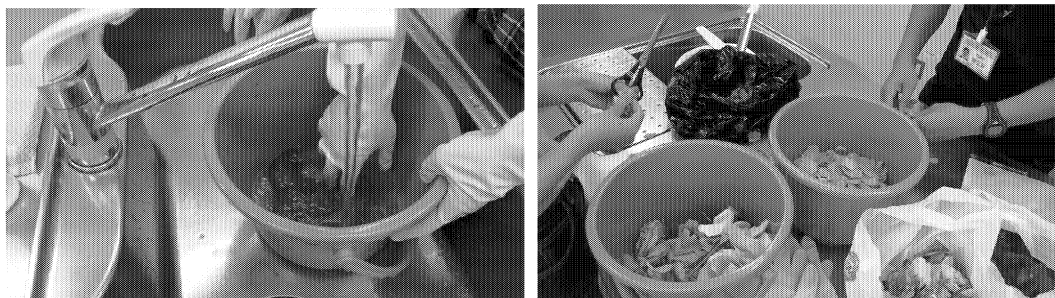


写真 2 染色実験の風景

表 2 染色実験にかかった費用

No.	物品	数量	単価 (円)	小計 (円)
1	シルクハンカチーフ (単位：枚)	15	500	7,500
2	花びら染溶解剤A (500g)	1	680	680
3	花びら染下漬剤 B(100g)	1	397	397
4	花びら染発色剤 C(100g)	1	453	453
	合計			9,030

4. 「つつじが岡公園運営会議」の開催

本年度、つつじが岡公園運営会議を 3 回実施し、公園の関係主体による賑わいのある公園づくりに向けて議論を行った。先進事例の調査から導かれた、責任を有する活動実施や当事者意識涵養のために、小回りがきく組織の構築が重要との知見をもとに、3 つの分科会を設けて、より具体的な検討を進めることとした。まず、「誘客連携分科会」では、周辺地域・施設と密接に連携をはかりながら、チラシ配布・キャンペーンを共同して実施することや誘客のための周遊ルート設定の検討を行うこととした。また、「市民連携分科会」では、つつじガイドボランティアや花緑増やし隊、区長 OB 会などつつじが岡公園と密接に関連する主体との協力体制の構築、市民活動の結集を通じた仲間作りの場の創設に向けて具体的な検討を行うこととした。最後に、来訪のためのアクセシビリティ向上が重要と考えられるため、「交通分科会」では公共交通の利用促進にむけた検討を行うこととした。

5. まとめ

つつじが岡公園の有効利用、入園者の増加を目的として、まず他地域の事例調査を行った。名古屋、神戸などの事例から、各地で住民参画型の公園づくりが試みられており、そのために、単なる活動の場として公園が機能するだけにとどまらず、その運営まで住民自身が積極的に関与していること、お互いの活動が互酬性という性質を持つことによって賑やかさの創出にも寄与すること、責任を有する活動やそのために小回りがきく組織の構築などが必要不可欠であることが明らかとなった。

また、公園の賑わい創出や収益確保に向けた「花を活用した観光振興」では、オンシーズン、オフシーズンに分けて検討した。オンシーズンでは、レジْنَアクセサリを用いた花を活かした物販の強化、ならびに視点場への誘導等を狙いとした疑似 AR の整備を検討した。この疑似 AR は、オフシーズンの公園来訪者にとっても効果的であると考えられる。さらに、イベント実施を念頭としたバラによる花びら染色の実験を行った。これらは試行段階であるため、今後は商品化、本格的なイベント実施のための体制づくりが課題となる。

さらに、上記の検討を具現化するために、つつじが岡公園運営会議において、誘客連携分科会、市民連携分科会、交通分科会の 3 部会を設置した。それぞれの活動を通じて施策を実施するとともに、その影響、効果をモニタリングしながら、組織体制のあり方、費用対効果の観点からよりよい公園づくりに向けた事業推進、多様な取り組みを行うことが今後の課題と考えられる。